
めだかボックス 【拒絶しされる者】

マカロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス 【拒絶しされる者】

【Nコード】

N6300Q

【作者名】

マカロン

【あらすじ】

様々な人間から誤解され拒絶され続けてきた少年は自身を超える異常、過負荷をもつ人間を求め箱庭学園へと行く。

異常なりに、過負荷なりにがんばろうとする少年の物語。

更新不定期です。

第一話 箱庭学園理事長のお話（前書き）

なんか思いついたので書きちゃいました。

よかったです感想とかください！！

第一話 箱庭学園理事長のお話

いつもと変わらないある日のこと、いつもとは違う出来事があった。

朝、目を覚ますといつも通り家族のいるリビングに降りる。

「おはよう」

そういつて俺はリビングに入る。いつも通り返事はない。部屋には父と母がいたが、声を発した俺を見て少し体を強張らせる。目には明らかな恐怖と侮蔑の色。

うん、いつも通りだ。

固まった両親は置いておき朝食を作らなければならない。いまは朝の七時。面倒くさいのは嫌なのでパンで済ませよう。

そうして焼いた食パンを一かじり。んっ、おいし。パンを食べ終わった俺は学校に行く準備をする。

俺は平和な日本の一介の通常の普通の並大抵の通り一遍のただのありふれた一般的な中学生だから毎日、勤勉に学校に行かなくてはいけないならないからな。

準備を終え玄関へ。靴を履き扉に手を掛ける。

「いつてきまーす」

返事は……ない。いつも通りとはいえ少し寂しい気持ちもする。

そう思いながら玄関を出る。

そしていつも通り、とはいかない光景が目映った。

それはこんな住宅街には不釣り合いな高級車。
リムジンなんて初めて見たぞ。いったいこんなところになんのよう
だ？

俺を幼少のころ散々誘拐しようとしてきた奴等じゃなさそうだし……

俺がそんなことを考えていると中から一人の老人が出てきてこう言
った。

「あなたが 霧島^{きりしま} 成人君^{なりと}ですね？

私は箱庭学園理事長、不知火 袴と申します。

君を箱庭学園の特待生として招待したい」

ふむ、よくわからないが

「とりあえず家に上がってください。

幸い今なら両親もいますしね」

そして俺は不知火さんとやらと一緒に中にはいった。

……今日は学校はあきらめよう。

そしていま、不知火さんは俺の両親と話をしている。普通^{ノーマル}がどう
とか特別^{スペシャル}がどうだとか。

あとその話によると俺は十中八九、異常^{アブノーマル}らしい。

「つまりあなた方の息子さんは、
人体では物理的に！
筋肉量的に！
脳構造的に！
解剖学的に！
不可能なことをしているのです。」

よくもまあそんなに熱く語れるものだ。

俺はただ他人がやったことを真似しているだけなのに。

「……それに、あなた方が一番わかっているはずです。
その恐怖に満ちた目がなによりの証拠ではないですか？」

それにしてもこの人はよく本人の前でこんなにも言えるな。
泣いちゃうぜ？ 俺。

「では成人君。少しこの老人の実験に付きあっていただきませ
んか？」

「あれだけ語ってまだ何か？ まあ構いませんが……」

ここまできたら一緒だろ。何をしても。
そうこうしているうちに目の前には八つのサイコロが用意された。

「これをどうしろと？ 占いでもするんですか？」

「ええ、まあそのようなものです。そしてあなたはただこれを振っ
ていただければ結構です」

よくわからないが振ればいいんだろっ、振れば。
俺は言われた通りサイコロを掴み投げる。

コロコロ、コロコロ、グシャ

サイコロは少し転がった後砕け散った。八つ全てが。全く同じタイミングで。

まるでその存在さえもを拒絶されたように。

「すみません。いつからか俺がサイコロやらなにやらを投げたりするとこうなるんですよ。」

けどまあ、あなたはこれがお望みでしょう？」

驚き眼を見開いている不知火さんに俺はそう言い放った。

「……すばらしい。噂通り、いえ噂以上のアブノーマル異常です。
だからこそ、それでこそ君を箱庭学園に呼ぶ価値がある。」

不知火さんがなにか言ってるようだがもう俺の耳には届いていない。
答えはすでに決まっているからだ。

「成人君。あなたには是非とも箱庭学園に入学していただきたい。
そして、ある計画に参加していただきたいのです。」

ある計画とは間違いなくあのバカげた実験だろう。
だが俺は

「不知火さん、俺は別に箱庭学園に行ってもかまいませんよ」

「……では」

「ですが、あの計画には参加致しません」

俺の答えは否、だ。

これ（異常）を制御などつくの昔に試したことだ。

俺ができなかったものが他の人間にできるわけがない。

「故に、俺は参加しません。もし俺の異常がアフノーマル必要ならば、あの計画にそれだけの結果を出していただきたい」

俺が静かにそう告げると不知火さんは少しの間目を瞑り

「
分かりました。今は諦めましょう。」

入学に関する細かい資料は追々伝えます。

「ご両親もそれでよろしいですか？」

いままで空気だった母にそう告げる。そういえばいたな。
ちなみに父はサイコロ占いの段階で会社に行った。

では、と一言言いながら不知火さんは帰っていった。
こうして俺は箱庭学園に行くことが決まった。

そういえば受験勉強しなくてよくなったな。

第一話 箱庭学園理事長のお話（後書き）

主人公がなぜこんなに理事長に目をつけられているのかは過去にある事件を起こしたからです。

それは後ほど本編、もしくは番外編などで語ります。

第二話 友達とお話（前書き）

なんかおかしなことに……

作者の妄想爆発です!!

第二話 友達とお話

現在、俺は校門の前に立っている。

箱庭学園。今日から俺が通うことになる高校の名前である。

第一印象はまず、でかい。

この高校は所謂マンモス校とやらで、普通科の他ありとあらゆる競技、球技、格闘技の特待生が所属しているらしい。

具体的には1〜4組までが普通科、5、7、9組が体育科、6、8組が芸術科。

そして10組以上の生徒は全員が特待生！

と不知火理事長さんに教えてもらった。

特待生の生徒達には学費免除を始めとした学園生活において各種便宜が図られているいて

さらに俺が不知火理事長さんから迎えられた13組には登校義務さえも免除されてるらしいのだが、

「この場合、入学式にも出席しないでいいのだろうか？」

ということについて、俺は悩んでいるのだ。

いや、だって実際に出席して13組生は俺だけでしたー。みたいなのだったら寂しいしね。

ただでさえ生徒数が多いのにその中で俺だけ端の方でポツーンってどうよ？ みたいな感じ。

とはいえ学園こくえんまで来たんだからとりあえず教室には行ってみよう。

クラスの案内板のようなのに群がっている有象無象を眺めながら俺はそう考えたのであった。

そして今13組の教室の前なのだが、声がまったくしないということやはりそういうことなんだろう。

ここにくるまでに様々な教室の前を通ったがやはり入学初日ということもあるのだろうがそれなりに声はしていた。

が、ここはまるでお通夜のように声がしない。

一人でもいいから誰かいないものか、と俺は教室のドアを開けた。ガラガラと学校特有のあの音と共に中に入る。

中には二つの人影。

一人は小学生くらいの身長のカギ。

もう一人は顔に黒い眼隠しのようなものを巻いた変なやつ。

……なんだこいつら！？

それから三人で自己紹介したところ、小さいガk……お子様は雲仙 冥利とってただいま九歳。

どうやら飛び級したようで生意気な性格をしている。

もう一人の目隠し君は長者原 融通という名前だが名前とは逆に融通がまったくきかない堅物らしい。

まあ詳しくいうと堅物ではなく公平に、フェアに、がモットーらしい。

この二人はこの二人で初対面らしいのだが何故かすごく気が合うらしい。

二人共ルールを守れるなと言ってるからじゃね？

そんな感じで少し談笑していると融通君一（名前で呼んでいいと言われた）が

「そろそろ時間ですし、向かいましょう」と言い

そういえば今日は入学式だったなと思い出し三人並んで体育館へ向かっていった。

入学式はなにも変わったことがなく終わった。
理事長の長い話から生徒会の話など他と変わりのない普通の入学式だった。
なにか捻りを加えてほしいものだな。

俺たち三人はそのまま教室に帰り、下校時間まで他愛のない話をして帰宅した。

冥利と融通君とは家が逆方向だったので途中で別れた。
友達とこんなに話したのは久しぶりだ。
彼らはいつまで俺と付きあってくれるのだろうか。

……できることなら俺のこの異能を見ても友達でいてほしいものだ。
そんなことを考えながら俺は帰路に着いた。

一週間後

俺たちは変わりなく過ごしている。

まあ変わったことといえば冥利が風紀委員会に、融通君が選挙管理委員会に入ったことくらいか？

冥利はまだ『風紀』の腕章がないので雑務しかできないとぼやいていた。

一年なんだからそんなもんだろというツツコミは野暮なのでしなかった。

冥利ならなんかしそっただけだ。

融通君は選挙管理委員会に入った。
もうそろそろ生徒会総選挙なので初仕事と張り切っているようだ。
目隠しと微妙な無表情の所為で分かりにくい俺と冥利にはこの一週間で分かるようになった。

あれはワクワクしている顔だ。

そういえば生徒会長に立候補してたあの先輩、
名前なんだっけ？

確か……『日之影 空洞』だったか。

あの人も十三組だからなんかあるんだろう。

しかし二人共委員会にはいるのか。

俺も何か入ろうかな？

まあ考えとこっ。

そんなこんなで俺の一日は過ぎていくのだった。

数日後、冥利が『風紀』の腕章を自慢げに見せてきた。
こういう場合俺はどうすればいいのだろうか？
とりあえず褒めておいた。

第二話 友達とのお話（後書き）

まさかのセリフ無し。

第三話 日常のお話（前書き）

遅れてすみません！

遅れた理由は期末試験だとかいろいろあったんですが……

今後はもっとはやく投稿したいと思います！

第三話 日常のお話

俺が箱庭学園に入学してから一カ月ほどたった日のことである。

冥利が風紀委員でヤンチャをして話題になり、融通君が最近学園に登校しなくなりなんか寂しいな〜と感じてきたその日。

俺はもう既に日課になるつつある校内散策をしていた時のことだ。俺が校内散策をするときはたいていは授業中なので、人に会うおとはほぼ無いのだが今日はいつもとは違った。

せんせー、目の前に人が倒れてるんですけどー

てなわけだ。

ええ、女の子ですよ、女の子。

男だったらスルーですが女の子だからね。

とりあえず声掛けよう。

「おーい、大丈夫か？」

これで返事がなかったら保健室にでも連れて行けばいいかな？
なんて思ってたなら

「おなか……減った」

……さて帰ろう。

すぐ帰ろう、今帰ろう。

厄介事のおいしくない。

そう思ってた帰ろうとしたらガシッ、と足が掴まれた。

「おなか……すいた」

声は弱弱しく、しかし掴んだ手には万力のごとくの力が込められ、
って

「痛い痛い痛い！！」

すごく痛い。これ絶対女の子の握力じゃねえよ。
ていうかいい加減離せ。

「おなか……減った」

「……食堂行くか？」

あっ、力が少し弱まった。

というわけで現在食堂。

あれから自己紹介したのだが、目の前の彼女は古賀いたみといって、
同じ十三組生らしい。

ていうか、同じクラス。

どうやら彼女は久しぶりに学校に来て、久しぶりに探検し、久しぶりに迷子になり、久しぶりにエネルギー切れになった。
そんな感じらしい。

「ていうか、エネルギー切れってなんだ、エネルギー切れって。ロボットか、お前は？」

俺が冗談交じりにそう聞くと、彼女は至極真面目に

「ううん、違うよ。私はロボットじゃなくて改造人間」

などと返してきた。

うん、改造人間？ 変わってるね、ハハ。

「で、その改造人間の古賀ちゃんはいったい何しに学園（こく）に来たのさ？ 十三組ならわざわざ来る必要ないと思うんだが？」

「あつ、そうだった！ 私、名瀬ちゃんに会いに来たんだった」

どうやら古賀ちゃんは名瀬ちゃんとやらに会いに来たらしい。
じゃあなんで廊下で倒れてたんだと聞きたいが。

「その名瀬ちゃんとやらは十三組生じゃないのか？」

「うん。名瀬ちゃんは十一組なんだ。なんでもスポーツマンの体が良く見たいんだって」

……それはそれで危ない子なんじゃないのか？

なんて思っていたら、古賀ちゃんが訂正してきた。

体の観察なんていかがわしい意味ではなく、十一組スペシャルの運動能力のデ
ータが欲しいらしい。

ふむ、ならば古賀ちゃんを改造したのはその名瀬ちゃんというこ
とか。

古賀ちゃんは親友と言っていたが向こうはどう思っているのやら。

「ところで古賀ちゃん。その名瀬ちゃんに会いに行かなくていいのか？」

俺がそういうと古賀ちゃんは少し固まり、時計を見て立ち上がった。どうやらよくなかったらしい。

古賀ちゃんは「またね！」と言いつて走り去っていった。

古賀ちゃんと分かれてまた校内散策を続けていると、人がいっぱい倒れている広場のようなところに着いた。

その中心に冥利が立っていた。

それも血だらけで。全て返り血なので問題ないがやはりいきなりは驚く。

周りを見ると倒れているのは全て不良だ。

制服改造、頭髮違反、etc.

冒頭でヤンチャをして噂になったと言ったがそれはやはり一部だけ。

この無駄に人の多い学園では噂も周りきらないし、なにより外見がアレなので軽く見られるんだろう。

とりあえず俺は返り血だらけの冥利にタオルを渡してやると思う。

「お疲れ、冥利」

頭にパサリとタオルを投げる。

そこで冥利はようやくこちらに気づいたようで

「ケケ　よくお成人。また学園ブラブラしてんのか？」

「おう、あいかわらずに暇も暇だからな」

これは事実だ。

まあ暇じゃないなら校内散策なんてしないしな。

「だからそんな暇なら風紀委員になれって、前から言ってるんだろ？　いいかげん入っちまえよな」

冥利はことあるごとに俺を誘ってくるが、お断りだ。
そんな面倒くさいこと誰がするかよ。

「まあいいさ。俺もテメーがそんな簡単に入るとは思ってねえしな」
なら最初から誘うなとは思うが、これはもう一種のお約束となっているので仕方ないといえば仕方ないが。

「ところで冥利、もう仕事は終わりか？　終わったんなら帰ろうぜ」

「おう。なら用意してくるから少しまってろ。」

待つてるとのことなので待つておくことにする。

そっぴやこの不良、誰が回収するんだろ？

そんなこんなで冥利がやってきたので帰ることにしよう。

今日一日のことを話しながら。

俺たちはゆっくりと帰路についた。

「で、どうだった？ 古賀ちゃん」

場所は薄暗い個室。

そこで二人の少女が話していた。

片方は今日成人が出会った少女、古賀いたみ。

「うん、ばっちり。ちゃんと接触してきたよ名瀬ちゃん」

もう片方は包帯で覆面のように顔を隠した少女。

どうやら名瀬ちゃんというらしい。

「性格はいたって普通。私が話した限りじゃそんなたいした異常^{アフノーマル}じゃない、と思う」

「そうか……」

古賀いたみの報告を聞き何かを考えるように押し黙る少女。

そんな親友の様子を不思議に思いながらも古賀はある疑問を口に出す。

「ねえ、本当にあの成人君があんな事件を起こしたの？ 私そんな風にはとても」

「間違いねえ」

古賀の言葉に半ばかぶせるように名瀬は言いきった。

「俺はこの目で見たからな。あの異常なほどの異常を」
アブノーマル

いつになく熱く語る親友に古賀は少し驚いた。

どんな時も冷静で 自分を改造したときでさえ冷静だった彼女が、
こんなにも感情を表に出している。

「あいつの異常、アブノーマルこの俺が必ず暴いてやる！」

禁欲さ（ストイック）。

それが彼女の異常。
アブノーマル

興奮を抑えきれていない親友の姿に若干引きながらも古賀は返事を
した。

「うん、そうだね」

第四話 箱庭学園第97代生徒会長とのお話（前書き）

更新が遅くなりスイマセン。
今回も短いですがご容赦を……

第四話 箱庭学園第97代生徒会長とのお話

古賀ちゃんと出会ってから一月たち、六月。

もう既に趣味となつている校内散策を終え、自分の教室に戻つてきた。

とはいっても、この教室には誰もいないので鞆を取りに来ただけだが。

教室をでて歩きだす。

目的地は特にない。

ただ適当に歩いてから帰ろうかというだけだ。

そんなことを考えながら歩いているとなにやら人の声が聞こえてきた。

争っているようなそんな感じの声。むしろ戦闘音か？

今行くと完璧に巻き込まれる感じだが、暇だから行ってみよう。

そんな感じで軽く声の聞こえる方へ歩いていく。

近づくにつれ激しくなる戦闘音。

たどり着いてみると、なにやらデカい人間二人が戦っていた。

一人は髪を立てたライオンみたいな人。

もう一人はいつの時代だ！と突っ込みたくなる格好をした如何にもな人。ちなみに長ランだ。

しかし二人共なんか見覚えある気が……

「ああ、生徒会長さんじゃないか！」

どうりで見覚えあると思ったよ。もう一人はここらで有名な不良だし。

つい声にだして驚いちゃったよ。ああ、恥ずかしい。

でも会長さん、滅茶苦茶強いな。

あの人ボロボロだし、会長さん全然傷ついてないし。

まあいい暇つぶしになったから帰るか。
そう踵を返したところで、

「まてよ！」

呼び止められた。

もう飽きたから帰るつもりだったんだがな。
でも先輩だし、反応くらい示してやるか。

「なんですか、生徒会長さん？」

俺はこれから下校するつもりなんですけど」

「……俺を、覚えているのか？」

ただ挨拶しただけなのに驚かれた。
俺を覚えているのかって、会長さんみたいな個性的な人、そう簡単に忘れないと思うが。
忘れてたけど……。

「日影生徒会長ですよ。ね？ お勤め御苦労さまです」

「ああ、いや、まあ……おう」

ただ労わっただけなのになんだか様子がおかしいな。
ひどく困惑した感じだ。

そんな傷付いてなさそうだけど、疲れてるのかな？
初対面の人とはそんなに話さない、とか。

「ああ、そういえばその人、大丈夫なんですか？ 保健室とかに連れていくなら手伝いますけど」

そういつて倒れてる不良を指差す。

……救急車の方がいいのかな？

俺がそう考えているとようやく落ち着いたのか返事をしてくれた。

「いや、俺一人で大丈夫だ。悪かったな、霧島」

今度はこっちが驚かされた。

会長とは初対面の筈なのに、名前を当てられてしまった。そこまで有名になった覚えはないのだが。

「おつと悪い悪い。俺はこれでも一応生徒会長だからな。全校生徒の名前くらい当然覚えているのさ」

最後に、まあ、生徒の名前なんて数えるほどしか呼んだことないがな、と呟いて。

「それにお前って結構有名なんだぜ。毎日フラッと現れているんなどころろついて帰る変わった十三組生だってな」

前言撤回、俺は有名だったらしい。

まさか趣味になりつつある校内散策が仇になるとは考えもしなかったぜ。

それから少し生徒会長さんと話をしていたのだが

「おつと、引きとめすぎたな。悪い悪い。」

俺はそろそろ帰るとするぜ。」

「そうですか？ 会長さんがそういうなら帰りますか。」

十分暇つぶしできたから満足だ。

俺は楽しかったですよ、と一言言いながら帰り始めた。
すると

「霧島」

またまた呼び止められた。

一体なんだと思いながら振り向くと、会長さんはいい笑顔で

「ありがとな」

そう言って去って行った。

何が”ありがとう”なのか分からないが、会長が満足ならいいだろう。

俺は今度こそ何も考えずに家に帰った。

第五話 風紀のお話 作戦会議編（前書き）

10日ぶりの投稿なのでみなさんお久しぶり！
不定期ですがまだまだ頑張ります！
感想などもくださればと思います

第五話 風紀のお話 作戦会議編

季節は夏。

日差しが強くなり、学校に行くだけで汗が滝のように流れだすそんな日。

俺はいつものように趣味の校内散策を終え、教室へと戻った。最近はこの一連の動作しかしていないなと考えながら席に着く。しかし

「……暑い」

そう、教室が暑い。

この箱庭学園はデカイだけあり、各教室に冷暖房は完備されているのだが、如何せん俺はそういう人工的な涼しさは使わないことにしている。

エコロジーだろ。

できるならそう、扇風機のようなものの方が好ましい。

アレの前に立ち、ア〜〜ということが俺の夏の楽しみ方だ。

そんなつまらないことを考えて暑さを紛らわしていたのだが、やはり人間というものは欲深いもので俺の手は自然と冷房のほうへと

「よー、何やってんだ？ 成人」

「ぬお!？」

急に声を掛けられ奇声を上げつつ、振り向く。

そこにはいつも悪戯しそうな笑顔を浮かべている冥利がいた。

べ、別に暑いから冷房を付けようとしたわけじゃないんだからな！

「で、何やってんだ？ 成人」

「いや、特になにもしてないが……」

「てことは成人、お前暇なんだな？ 暇なんだろ？ 暇って言え！」

いや、最後は命令になってるし。

「まあ、確かに暇なんだけどな」

だからどうしたって言うんだ。

お前が俺と遊んでくれるのか？ この野郎！

そんな子供みたいな文句を（心の中で）言っていると

「よし、ならちよつと来い！」

ぐつたりと机に垂れかかっている俺の襟首をグツと掴むと、そのまま引きずられてしまった。
えっ、ちよっ、何この状況？

「ドナドナドーナー」

「その歌やめろ」

「はい」

俺はそのまま何処かに連れて行かれた。
ドナドナドーナー。

てな訳で、はい。冥利に引きずられて特別教室錬に来ました。つまりアレだ、風紀委員会のところ。

何回か遊びに来たことがあるので全体図は頭に入っている。ていうか、校内散策で毎回通るからな。

「おら、着いたぞー」

ドサリ、と荷物のように投げだされた。

投げた本人は何事もなかったかのように教室に入る。テメエ、覚えてろよ。

「お邪魔しまーす」

先に入った冥利の後を追ひ、俺も教室に入る。

中では冥利を含めた五人が座っており、一斉に俺を見る。

こいつらは雲仙冥利率いる風紀委員会第三部隊で主に荒事鎮圧が仕事だ。

いや、まあ風紀委員会はいたいそんな感じだがこいつらは普通の風紀委員より危ない仕事をしていると考えてくれ。

しかし隊員は全員女子。

もしかして冥利の好みで選んだんじゃないかと疑いたくなるような奴らだ（特に呼子さんとか）。

まあ、ここにいる全員が戦える奴だから違うとは思っただが。

ついでに言うと冥利はいま副委員長だ。実力で勝ち取ったらしい。

「成人、とりあえず座れや」

「言われなくてもな。立つてろなんて言われたら帰るわ」

そう言つて前回遊びに来たときに用意された席に座る。
座った瞬間に呼子さんがお茶を出してくれる。
出来た人だ。

「で、なんで俺を連れて来たんだ？」

まず当たり前の疑問を投げかける。
いつもは俺から遊びに来ていたからな。
その問いに冥利は答える。
てめえプリン食べてんじゃねえよ。
そして周りのお前ら、和むな。

「ん、あーアレだ。仕事手伝え」

「えー、やだ」

即答。

俺は暇だが、面倒くさいことは嫌いなんだ。

「ケケ　どーせ暇なんだろう？　だったら少しは手伝えよ」

「……わかったよ。手伝えばいいんだろ、まったく」

誠に不本意だが、まあ仕方ない。
冥利が俺に頼るくらいだ。何か普通^{ノイマル}じゃあ対処できない事態にでも
なったんだろう。

校内散策のとき、騒がしかった記憶があるし。

いや、今更の後付けじゃないからな！

ただ描写されてなかったただけであって、本当だからな！

「てな訳で、二班に別れて行動する。いいな、っておい！
成人。テメー聞いてたか？」

「悪い、まったく聞いてなかった」

まったく悪びれずに言う。

けどまあ、予想は付いてる。

冥利でも難しく、スペシャルでは不可能。

なら、そんな存在は限られてるだろう。

俺や冥利と同じ、異常だ。^{アブノーマル}

冥利は戦えない奴ではないが、それでもまだ十歳だ。

装備も整っていないし。それに程度にもよるが一人や二人くらいなら、冥利だって俺を頼らないだろう。

「おい、呼子。このボケにもう一回説明してやれ」

「はい、雲仙副委員長。――では説明いたします。

目標は校内の風紀を乱している十三組生。数は八。

一般生徒にも被害がでているので迅速に対応してください」

「つー訳だ。おーかた例の計画に参加したくて痺れをきらしたんだろつーぜ」

「ああ、まあ十三組生が在籍してる理由の大半がソレらしいしな。
妥当なところだろ」

「で、だ。今の委員長は特別で、戦闘力はずば抜けていいんだが、
オレタチ異常みたいな輩の対処は心得てないってよ。
だから、この件は俺に一任されたってわけだ」

「わかった、わかった。で、俺は何人やればいいんだ？」

「ケケケ！ 相変わらず軽く言うなー、おい。
まあ、半分ほど頼むぜ」

「場所は？」

「特別教室校舎棟に三人、旧校舎近くに五人です」

呼子さんが答える。

なら、旧校舎側のが近いな。
そっちにしよう。

「なら冥利、俺は旧校舎の方に行くことにするわ」

「おー、任せたぜ」

冥利がひらひらと手を振る。

あいつはまったく心配してないな。
まあそれでも困るんだが……

深呼吸して、よし！

暇つぶしに行くとしますか。

第五話 風紀のお話 作戦会議編（後書き）

そつえば雲仙（姉）の数字言語って誰か解読できた人います？

いるなら教えてほしいです……

ちよつとがんばっても無理だったので……

第6話 風紀のお話 実践編（前書き）

三か月ぶりです。

…… スイマセン！！

第6話 風紀のお話 実践編

少し歩いて旧校舎の近くまで来た俺はとりあえず目的の五人を探す。

暴れている、とのことなのですぐに見つかるだろう。そう思いながら旧校舎の周りを歩いていく。

だが、一向に見付かる気配がない。

冥利の話では異常同士の争いだ。アフノーマル

ならば、ただの喧嘩の規模ですむはずがなく、例えもう終わったのだと言っても争いの痕跡まで消すことはできない。

騒ぎを聞きつけた野次馬の一人もいない。

つまりこれは

「誘いこまれた？ 一体誰に？」

俺がそんな疑問を頭に浮かべていると

ドガア！！！！

凄まじい衝撃が俺の横に生じ、そのままの勢いで吹き飛ばされた。

「かはっ」

吹っ飛ばされた勢いのまま壁にたたきつけられた俺の肺から空気がもれる。

まるで三階ほどの高さのビルから飛び降りたかのような、それほど
の衝撃だった。

攻撃を受けた俺はすぐさま体制を立て直し、襲撃者を睨む。

どんな筋骨隆々の男なのだと思ってみれば、襲撃者なんと小柄な少年だった。

下手をすれば冥利よりも、と思うような、そんな大きさで。

いや、そんな大きさであれほどの力を出せたことのほうが驚きだった。

それはいつぞやか理事長の言ったように筋肉量的に不可能なのだ。

どこの世界の十歳児がまるでダンプに引かれたような衝撃を出せるというのか。

いや、まあ目の前のこいつは十歳ではないかもしれんが。

しかし俺の役目は荒事鎮圧。

つまり風紀委員の領域だ。

先ほど言ったように、誘いこまれた（・・・・・・）ということならばこいつの狙いは冥利だということになる。

つまり、俺の友達を。

急激に頭に血が登って行くのがわかった。

あんな拳で、俺の友達を、傷つける。

ならばもうなにも考える必要はない。

目の前のコイツが何者で、なにが目的なのかも関係ない。
ただただコイツを……

「ぶち殺す！！」

雄たけびを上げながら俺は目の前の敵に飛びかかった。

一方その頃、もう片方の現場に向かった雲仙冥利はというと、こ

ちらも同じように何者かと戦っていた。

状況もまったく同じ。

調査を開始しようとした雲仙にいきなり襲いかかって来たのだ。

自分で改造したスーパーボールを相手に投げながらも雲仙は考える。

「（一体こいつ何もんだ！？ 異常三人の鎮圧だと思ってたら訳わかんねー黒色野郎一人。どうなってやがる！？）」

思考しながらも目の前の相手からは目を離さない。

自分の投げたスーパーボールを全て避けられ、雲仙はいら立っている。

だが同時に、相手の脅威もしっかりと感じていた。

「（クソ！ 俺の攻撃を確実に避けてやがる）」

雲仙の武器は改造スーパーボール。

自らの改造で威力・弾力を底上げたソレはいくらここが屋内ではあいつてもとうてい見切られる速度ではない。

自分の小柄な肉体を逆手にとった、上方からの攻撃も組み合わせている。

なのに、当たらない。

その事実が雲仙をいら立たせているのだ。

「（クッソ！ ここは一旦引くか？ いや、だが！）」

引けない。

相手の目的すらも明らかになっていないのだ。

もしかしたら風紀委員だけを狙っていて偶然、自分がその一人目なのかもしれない。

だとしたら、引くわけにはいかない。

両手で持てるだけスーパースポーツボールを持ち、投げる。

これだけの乱反射。

避けられないだろう。

それこそ投げた自分でもなければ。

「クハッ！」

だが、それをも相手は避けてみせた。

自分でも計算できるかわからないほどの量を、全て！

だがしかし、それでも雲仙は笑っていた。

気がふれたのではない。

分かったからだ、相手の能力の正体が。

「ケケ！　今のでよーやく分かったぜ、黒色野郎。

テメーのそれは速さじゃねえ、俺の玉全てを見切ったのは視力でもねえ！

……いや、正確には見切つてさえいねえ！

テメーのソレは、素早さだ！

素早さ　もつと言えれば反射神経。

テメーは考えて動いてねえ、ただ自動的に来た球全てかわしたただけだ！」

雲仙ははつきりと自分の得た答えを告げた。
しかし

「ご名答！　よくわかったなガキイ！　だが、それが分かったから
つてどうする？」

俺の反射神経は　俺の自動操縦は！
オートパイロット　分かったからってどうにも
ならないぜ！」

男は高らかに叫ぶ。

それもそのはず。

雲仙の手札がスーパーボールだけならば、男の勝ち揺るがない。全てをよければいいだけの話だ。

だが、しかし。

雲仙冥利は一年生にして風紀委員会副委員長。

手札がスーパーボールだけなどもちろん、あるはずがない。

「ケケケ！ それならこれも……避けてみやがれ！」

それは先ほど放った以上の乱反射。

避ける隙間もないほどの弾幕が男に向かう。

だがそれでも

「だから 無駄だってーの！」

それすらも男は軽々と避ける。

機械的に、自動的に、そして最小の動きで。

全てを避けてみせた男は不敵に笑う。

「たいした数だ。だが俺には意味がなかったな！
今度はこっちからいかせてもらっ……ぜえ！？」

男の踏み出そうとした足が動かなかった。

いや、足だけではない。

首も、腕も、腰も体全身が縛られているかのように。

いや、事実縛られていた。

無数のワイヤーによって。

それだけで男は瞬時に理解した。

「デメエ！ まさかさっきのは！？」

「ケツ！ 大げさに避けられたりしねー分簡単だったぜ！ テメーを縛るのはよ！」

「だが、こんなワイヤー程度！」

そう、男も雲仙が隠し玉の一つや二つはもっているだろうと思っていた。

事実こんなもの男の筋力なら数秒で引きちぎれる。
だが

「そう、その数秒でいいんだよ。」

男は雲仙が手にしたものを見て瞬時に悟る。

「まさか！？」

「なあ、黒色野郎！ テメーは爆発を！
避けれるかあ！！」

次の瞬間、箱庭学園に爆音が響いた。

遠くから爆音が聞こえてきた。
それはつまり冥利が火薬玉を使ったということだろう。

俺と冥利共同開発の代物。

作ってるうちに、なんだかテンションあがってきて最終的にとんでもない威力になったやつ。

それを使っただってことは相手はそうとうだったってことか。

「しっかしどうすつかなコイツ」

俺が言ってるコイツとは目の前で地面に這いつくばってる少年。

先ほどの襲撃者のことだ。

まあ、あのあと戦闘をしたのだが……普通に倒したってことで、しかしいつまでもここにいてもしかたない。

目標は鎮圧させたことだし、一旦風紀委員会に戻りますか。
おっと忘れるとこだった。

「少年、もう帰ってもいいぞ」

と、一言言い残して俺は帰った。

数分後、呻きながらもなんとか立ち上がった少年はポツリといった。

「……なんだよアイツ……化け物じゃんか……」

話しがちがうぜ　と言って。

そして少年はまだダメージの抜けきらない体で、フラリフラリとどこかへ消えていった。

風紀委員会のところに帰ってきた俺の目に映ってきたのは傷だらけの冥利だった。

あの爆音からしてそう軽くはないけがだろうと思っていたが、中々の傷だった。

まあ本人はけろつとしているから大丈夫だろう。

しかしまあ今日は疲れたなあ。
帰って寝よう。

俺は今日起きたことに深く考えず帰って寝た。

もう既に俺が、あの計画に組み込まれていることもしらずに。

第6話 風紀のお話 実践編（後書き）

感想・評価まっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6300q/>

めだかボックス 【拒絶される者】

2011年7月24日10時31分発行